



過去のTOPページ

干し柿を軒下に吊す季節になりました。



12月初旬 軒下に吊し干される庄内柿、寒風にさらされ甘みがましていきます。

庄内平野に白鳥の飛来

11月初旬撮影 暖冬の庄内秋。今年もシベリアから多くの白鳥が平野に飛来してきました。白鳥は50羽前後の群れをつくり、田んぼの中の餌をついばんでいます。よく見ると、くちばしを田んぼの水たまりの中に入れて、土の浅いところに入れていきます。餌にしているのは、落ち穂や植物の根でしょうか。日本海にそそぐ最上川河口で餌付けをしていることもあり、毎年7千羽から8千羽が平野を訪れてくれます。暖冬のためか、いつもの年より多くの田んぼに飛来している白鳥が見られました。



稲刈りが始まる

いつになく美しく黄金いろに輝く平野。風にゆれる穂は8月、9月の雨の少ない乾いた天候で、穂波のように、きれいにゆれています。

平野では、20日ころからコンバインを田んぼに入れ収穫をする人がでてきました。今年の収穫ピークは、27日ころ。出穂のおそい品種のコシヒカリは10月5日ころの刈り取りになります。



9月15日米部会員による田まわり

気持ちのよい秋晴れがつづいているこの日、お米生産者による会員のほ場の田まわりが行われました。今年、植え付け後の6月後半から7月末にかけての長雨、日照不足は平成7年、13年の不作の時と同じ天候の流れで推移し、作柄の大変悪い稲を予想し当初心配をしていたが、8月にはいったとたん好天気になり、稲によい天候は9月になっても継続したため遅れていた生育も挽回し、ほぼ平年並みの作柄が確認できました。その後の会合でも、安堵し、ほっとした生産者の話しがだされました。

田んぼ中での集合写真

今年の米づくりは 五十嵐良一

今年の米作りは、育苗期は曇天・雨続きから始まりました。6月は割合に好天に恵まれたものの、7月も雨続きで平年の半分以下の日照となり軟弱な稲体となり、7月12日には、「葉イモチ注意報」が出されました。地域的に若干葉イモチの発生があったと聞きましたが、8月に入ると天候も一転し炎天猛暑、連日30℃を超す天候で、7月の生育の遅れも出穂時には3～5日程度の遅れまで回復しました。

平成15年は冷害、16年は台風による潮風害で不作でしたが、今年は今日まで台風の害もなく、心配されたイモチも穂イモチの大発生までは至らず、昨年程度の平年作まではこぎつけそうです。それでも農家は心配性です。籾すりをして玄米を袋に入れるまで、あれやこれやと心配し考えをめぐらせます。

7月中の長雨で茎数不足で根張りも充分でなく籾数不足ではないだろうか？整粒歩合が悪くならないだろうか？あまりの猛暑による急激な生育で出穂し籾殻は小さくなり千粒重が小さいのではないかと？出穂後の暑さは昼夜の温度格差が小さいから稲が疲れて収穫まで稲体が凋落しないだろうか？暑いと糠層ばかり厚くなり収量は取れないというけど、どうだろうか？食味に影響しないだろうか？こういうのを取り越し苦労というのだけれども……。

私のメロン畑がある庄内砂丘から見おろす庄内平野は一面黄金色になりつつあります。刈り取りは出穂から積算温度で1,000℃前後、稲の穂の登熟を見ながら水分が23%前後で刈ります。9月20日頃からの収穫作業になりそうです。

ひとめぼれ、はえぬき、でわのもち、コシヒカリの順に10日間位で収穫です。乾燥、籾すり、調整には気を抜けません。きっちりと15%仕上げ、肌ずれや胴割れのない、整粒歩合の高い品質の良い米に仕上げたいと思っています。

今年も庄内からの秋の便り「庄内柿」をよろしくお願ひします

9月に入り、日中はまだまだ暑さが厳しい我が庄内も夜になると虫が鳴き、秋の気配が感じられるようになり、夜明け近くなると眠気の中で布団に手が出る気候になりました。

秋は収穫の季節です。まもなく始まる稲刈りを終えると10月にはもう柿の収穫の季節を迎えます。

毎年のように繰り返し伝えられる異常気象のニュースですが庄内地方も例外ではありません。今年の7月の日照時間は平年の何と27%だそうです。本当にいやになるくらいの毎日続く曇天長雨、一転して8月は晴天高温続き、それでも我が家の柿たちは何とか平年並みの粒張りとう着果数を確保しています。

作物の生命力には本当に驚かされますし、尊敬の念さえ抱かせます。長期予報では9月も比較的高温で晴れの日が多いとの予報ですのでおいしい柿が収穫できるのではないかと期待しています。

出来るだけ農薬に頼らない柿づくりを考えると一方で、時には病虫害に犯され、見た目が悪いとか痛みやすいというクレームに耐えなければならないということもあたりで、柿作りもなかなか一筋縄ではいきません。それでも土着の微生物を生かしたぼかし肥を施したり、米酢、木酢液などを散布することで農薬による防除を最小限に抑え、出来るだけ安全でおいしい柿づくりに頑張っています。

2006年9月1日 志藤 正一

(出荷時期 10月下旬～11月下旬)



8月27日 提携米ほ場確認会を実施
提携米アクションネットワーク代表橋本明子、事務局を迎えこの時期恒例になっている、提携ほ場の生産者と作付けほ場の確認、交流をおこなった。(今回は13人を実施)
今年は、特に遺伝子組み替え稲の試験栽培が宮城で行われていることもあり、遺伝子組み換え作物に反対する立場から各農家にも反対の意志表示の必要性和キャンペーン取り組みの説明確認も併せておこなった。

9月2日(土) GMOフリーゾーン宣言・東北ネットワーク 主催の集会案内 [060902 gm.pdf へのリンク](#)
[GMOフリーゾーン宣言・東北ネットワーク抗議文050903sengen.pdf へのリンク](#)

私たちは遺伝子組み換え作物に反対し、遺伝子組み換え作物は植えません



GM稲栽培実験中止を求める署名用紙
[no gm shomei.pdf へのリンク](#)

阿部正雄
五十嵐良一

工藤広幸、祐生

菅原孝明

芳賀修一



皆川裕一
小野寺仁志

富樫英治 高橋直之

野口吉男

富樫俊悦



石垣忠彦

齋藤健一

志藤正一





8月に入り快晴の日が多く、登熟は、出穂、開花時期が天候に恵まれ生育の遅れを挽回してきた。庄内での出穂は遅れ、ささにしき・はえぬき・ひとめぼれ10日～15日のあいだ例年より4日前後おそかった。こしひかりで20日～25日(山間部)である。

8月15日東北農政局の発表した作柄概況(8月15日現在)では山形県は平年並みの庄内はやや不良とあった。

羽黒地区平野部の「ひとめぼれ」

去りゆく夏の陽からの贈り物「サンジェルモン」をお届けいたします

今年も大雪の影響で、雪解けが遅れ春の農作業は大車輪で働いたのですが、定植畑の準備に手間取り苗の植え付けは、平年より10日も遅くなりました。大きく伸び過ぎた苗の為、根の活着、生育が悪く管理に神経をつかわされましたが6月の好天でなんとか乗り切る事が出来ました。

7月に入ると、うっとうしい梅雨空(日照時間が平年の20%程度)が続き、軟弱になった葉には病気が大発生しました。(ベト病、ウドンコ病) 殺菌剤の散布を当初計画より増やしたり、ミネラルや食酢、竹酢液を散布し、なんとか元気を取り戻そうと努めましたが、なかなか樹勢が回復せず通常1株4個の果実を残すところ更に1～2個摘果せざるえませんでした。

8月の梅雨明け後の暑すぎる程の好天でようやく収穫まで、こぎつけましたが一週間程の遅れとなりました。ネット形成期の大雨や日照不足で、粗いものや、大割れのもあり見た目はあまり良くありませんが、お盆過ぎの連日35℃を越す日射のおかげで、糖度は充分あるようです。

豊かな月山高原の自然の中で育ったメロンを今年も味わっていただければ幸いです。06/8/28 齋藤健一

= 栽培概歴 =

播種 4月30日、5月5日の2回
定植 6月15日
開花期 7月20日 前後
交配 ミツバチ
肥料 有機由来95% 以上(N換算)
防除 殺菌剤5回 殺虫剤2回
その他 竹酢液、食酢、苦参エキス、ミネラル等



ただ今、枝豆収穫真っ最中！ 今年も、有機栽培の美味しい枝豆が穫れました。

昨年と比べ、今年の豆は着粒数が少なく、反収は今一と言うところです。

今年の天候は、7月は連日大雨で、良く畑作物が育ったと感心するほどで、収量への影響が出たようです。但し悪いことばかりではなく、雨で落とされたのか虫がいつもより少ない気がします。8月に入り梅雨が明けからは一転して毎日が最高気温で34度とうだるような暑さが続き、枝豆の実入りには好適となり、甘みと「だだ茶豆」の独特の香りの乗った美味しい枝豆に仕上がりました。是非食べてみてください。

これから、9月上旬まで、我が家では、ほぼ連日朝の5時から収穫し、脱粒機に掛け、机に空けて手で未熟粒や虫食いの莢を選別し、軽く水洗いと脱水、そして計量袋詰めした物を予冷して出荷、と一連の作業が続きます。

我が家は、今年から妻が庄内協同ファームの事務の仕事辞め、2人で農業をする事に成りました。農業専業として経営を成り立たせる為には、枝豆は重要な作物となります。

農薬と化学肥料を使用しない栽培は、雑草と虫の退治が難しいことや、肥料の効き方をコントロールできない等困難なこともありますが、作物の力を信じていれば十分可能な栽培と思います。

今後も、皆様に評価して頂ける作物を育て、お届けしますのでどうぞよろしくお願い致します。

06/8/20 芳賀修一



7月19日撮影 生育状況と、今年最初の収穫時期などを確認するため、枝豆畑を巡回しました。この時期までは、今年も、豊作の予感がしていましたが、当日の夕方から8月初めまで思いも寄らぬ長雨で、特に早生種の生育に影響がでました。その後は天候にも恵まれ収穫作業にも熱が入っています。

栽培区分

有機・転換中有機、化学・農薬肥料使用しない栽培

7月13日 第4回生きもの調査

庄内環境創造型農業推進会議の生産者グループのみずほ有機栽培グループが、流通団体とおこなった生きもの調査。 [調査結果060713.pdfへのリンク](#)

6月30日 ユーアイコープ「生きもの調査・草取り体験」

庄内産直ネットワーク（庄内協同ファーム・JA庄内たがわ）でおこなっているパルシステム連合・ユーアイコープとの田んぼ体験交流の一つとして、今年は「生きもの調査・田んぼの草取り」をプログラム13名の役職員がJA芳賀さんのほ場で研修体験をしていきました。 [調査結果060630.pdfへのリンク](#)

6月26日 藤島地域「東栄小学校」の田んぼの生き物調査を実施

昨年からすすめている、東栄小5年生1クラス22名との生き物調査を今年も実施しました。当日は、天候にめぐまれ藤島庁舎や庄内農業高校生の生徒11人も参加しイトミズの数調査しました。 [調査結果060626.pdfへのリンク](#)

6月13日～15日 JAS有機農産物の監査が実施される

登録認定機関のアファス認証センター(株)による有機認証、栽培履歴監査が実施されました。今回は、JAS法の改正期にあたり、種子・育苗培土の確認が特に強化されていました。

5月29・30日 藤島中学1年生106名による「田んぼの生き物調査」実施

今回の田んぼの生き物調査は、藤島中学のキャリア教育事業の取り組みで、地域の生産者や調査協力者に藤島庁舎、農業技術普及課、水土里社、JA庄内たがわ、東北公益大生、田んぼのプロジェクトからは指導に岩淵氏やイストラクの方など、140名をこえるたくさんの人たちの参加協力を得てすすめられました。

[内容・調査結果060526-30-date.pdfへのリンク](#) 庄内協同ファームだよりNO112PDF



庄内産直ネットワークの活動である消費者交流に参加

5月20・21日 今年も埼玉県のコアイコープとの産直交流を実施。今回はJA庄内たがわ（羽黒）のほ場で田植え活動と一緒に行いました。



5月13日。

ポカポカ陽気から一日おいて寒い日になってしまう、安定した陽気がすくない田植え日和が続いています。有機栽培米をめざして、今年から紙マルチ栽培に取り組んだ石垣さんです。この日は風の強い日でしたが後継者の息子さんと一緒に作業中でした。また、隣のほ場に早期湛水シトロトロ層による有機栽培にも取り組みを始めました。



紙マルチ田植え中（石垣）

冬、雪の多いときは春が早いと云われていますが今年はいつになく遅い春でした。気温のあがらない日が多く4月の苗の生育は4日くらいおくらしている様子。桜の見所時も22日前後とおくれ花見もポカポカ陽気とはいえない寒い天気の中でした。全国的にも雪が多かった年ですが各地はどうでしょうか。



庄内平野の米つくりの紹介が、小学生の教科書「社会科資料集5年 インターネットで調べよう 日本標準（種まきじいさん）」に紹介されています。

「春になり鳥海山の雪がとけたところが、腰をまげて種をまくおじいさんのような形になるころ、苗づくりをするという話しです」。<掲載されている写真を参考にアップしました。[私たちの事務所も右上](#)辺りにあります>

ただ、機械化や化学物質資材に頼る近代農法は、自然の教えより技術的な変化による作業効率を求め、実際には、この絵のような鳥海山の雪融けより早い時期に作業がおこなわれています。この形がはっきりと現れるのは、田植え時の5月20日前後くらいからです。

「庄内協同ファーム 2006年度・生産者集会」開催される

庄内協同ファームでは毎年、農作業が忙しくなる前、生産者集会を開催していて、今年は3月14日（火）に当地域にある四季の里“楽楽”で行ないました。

「'05年活動総括と'06年活動計画」について事業管理部から“作付け実績と作付け計画”、認証管理委員会からは“認証への取り組み”、また安心農産物委員会より“生産・環境活動”の報告が行なわれ、その後“米部会の生産・環境活動と目的目標の総括”、“有機米栽培の収量目標と経済性について”の事例報告があり、昨年の実績を踏まえ、本年は更なる有機化と増収それに環境に配慮した生産活動を行なうことを確認しました。

その後、来賓としておこし頂いた(株)大地の朝倉氏、県民生活協同組合やまゆりの川崎専務理事から、特に米の消費はきびしい状況に置かれ、拡販・価格の維持は難題との事でありましたが、産直の意義を再確認し、厳しい状況を何とか乗り切ろうとの元気が出るお言葉頂くことができました。

休憩を挟んで山形大学農学部教授 楠本雅弘氏から“楽しい有機農業”、“担い手対策・集落営農”のテーマで講演を頂きました。今、2007年から始まる「経営所得安定対策」がスタートするのにあちこちで説明会が開催していますが、いくら説明を聞いてもすっきりしないでいましたが、楠本氏の講演を聞いていくらか政策の方向が見えたみたいでした。いよいよ、農作業スタート 新たな事にチャレンジ！



2月27日(月) 昨年につづいて庄内産直ネットワークの定期総会と環境創造型農業研修会を開催
午後から開催された、庄内環境創造型農業推進会議主催の「環境創造型農業研修会in庄内」
- 人と生きものにやさしい農業 - をテーマにした研修会には、基調講演に農と自然の研究所代表 宇根豊氏が「生きもの調査は百姓仕事」と題して講演した。

当日、約120名ほどの生産者、調査協力者の参加者が集い、庄内で農業環境を新しく創造していくために農業をどう実践し広げていくのか、昨年の実践報告やこれからの計画について報告し合い、理解を深めた。



「環境創造型農業研修会in庄内」の開催案内・プログラム[060227.pdfへのリンク](#)

2月13日(月)に静岡県の川合肥料が来所。今年扱う予定である肥料の効果や新JAS法への対応などをふくめた説明会を開催。

新有機JAS法改正による研修会

2月10日(金)～9日(土)にかけて庄内協同ファームで実施し講師にアファス認証センター(株)の渡邊氏を招請し改正ポイントの説明をうけ理解を深めた。
庄内協同ファームでは、有機農産物、加工食品、小分け業者とそれぞれの認定事業者になっているため、今回の更新研修会には45名の農産物生産者、加工食品の製造に携わる人たちが受講した。

訃報
関係者 各位

当法人の赤かぶ漬け生産者である富樫善之が雪下ろし作業中の事故で、
1月15日午後7時頃に逝去致しました。(享年53才)
富樫善之は、庄内農民レポート時代からの古いメンバーで農産物の生産・漬け物の加工生産を行う、自立した農家経営を夢みていました。
志なかばの無念を痛み、生前のご厚誼を深謝し謹んでご通知申し上げます。
告別式 日程[060116yosiyuki.pdfへのリンク](#)

11月4日 NPO法人 民間稲作研究所の稲葉代表をお招きし稲作技術の研修会を開催
生物多様・湛水ほ場管理をテーマに、(1)生物多様性による抑草技術 (2)苗づくりの基本 (3)栽培の体系 (4)質問及び意見交換を行なった。
また、庄内農業技術普及課の安藤指導員の調査実施報告もありました。

[生き物調査報告zisi.pdfへのリンク](#)
[2005年の庄内実施地点zisi point.pdfへのリンク](#)

10月28日 JA庄内たがわで、営農指導員を対象に「冬期湛水・稲作研修会」を開催
講師に東北大学大学院の伊藤助教授、古川農業試験場の小山主任研究員

29日に伊藤助教授、安藤農業技術指導員による冬期湛水ほ場の土壌調査を実施



NPO法人 民間稲作研究所の稲葉代表生物多様・湛水ほ場管理による稲作技術の第一人者です



土壌調査の断面図（鶴岡、三川、藤島）昔湿地帯であったことを採掘ほ場で説明。作土も有り硬盤もよく実施したほ場が、湛水ほ場に適した土壌とのことでした。（採掘土壌は研究室で分析）

9月24日-25日。ユーアイコープ（埼玉勤労者生協）組合員の方が春の田植え体験につづき、
稲刈り体験交流に庄内

産直ネットワークの受け入れ（今回は庄内協同ファーム藤島町志藤ほ場）で24日庄内にきました。訪れた親子さんと関係者50人は、有機栽培のほ場に入り手鎌で刈り取ったり稲穂を杭かけ天日干したりして稲刈り体験を楽しみました。きてくださる消費者の方の中には、昨年、今春と二度つづけて訪れる家族の方も多くなり、回をかさねるごとに庄内の人や農業への理解、親しみが深まってきているようです。

稲刈り後に丘地にある柿畑に移動し稔りの秋に似合いの新米のおにぎりを食べながら、参加者ひとりひとりが自己紹介し日頃の思いなどを語り合い、相互理解を深めました。



9月9日 米生産者の米部会による圃場回り

05年産米の生育を確認をしました。

草丈、茎数、穂数などを計測調査して収穫量の見込み出荷時期の確認をしました。今年は、天候に恵まれたこともあり過去2年間の不作をのりこえ、どの圃場、品種ともできの良い作柄のようです。生育も5~7日くらい早く。作業段取りがつけば9月20日前後からの収穫が始まります。



8月26日アジア学院(栃木)の研修生が庄内協同ファームに

アジアやアフリカの農村地域で草の根活動をする農村指導者が、日本から農業と農村を学ぼうとアジア学院に9ヶ月間留学し、農村リーダー養成の研修を受けています。藤島町には、11年前から毎年訪れ庄内の農業を学んでいきます。

庄内協同ファームでも毎年研修生を受け入れていますが今回は先生を含め17名。研修生の多くの方は、母国で農業を指導する立場の人たち。知識を吸収しようと真剣に話を聞き、質問をしています。庄内協同ファームでは、特に組織構成やマネージメントの仕方に質問が多くありました。また、流通の方法としての生協や宅配会員のカatalog販売チラシにも興味をもっていたようでした。

加工場の中も見学して、米田郎(米粉で製造)やもち製品について質問をしていきました。私たちの商品もいくつか試食し、みなさんに、おいしく食べていただきました。最後に笑顔での記念写真です。



第4回「田んぼの生き物調査」8月20・21日

庄内環境創造型農業推進会議・庄内ふゆみずたんぼのみずほ有機米生産グループで、第4回目庄内生き物調査を8月20日午後5時~6時講習会、翌日21日午前9時~12時に圃場で実施しました。

指導に田尻高の岩淵氏、今回は株大地のお米担当の方、MOM米店や農家(佐藤秀雄さん)に夏休み農業体験にきていた3人の女子中学生も短時間であったが参加しました。

クモの棲息が多くなる時期で調査を期待したのだが、周辺圃場でカメムシ防除した影響か田んぼの中や畦畔に棲息がみられず残念であった。イトミミズは間断かん水で少なくなっているのではないかと考えていたが、7月の調査数を維持していて予想と違っていた。年間の中でどのような変化をするのか興味深いところであります。



第3回「田んぼの生き物調査」7月5日・12日に開催

7月5日は、余目町菅原（専）圃場の30aを東北公益文科大学の学生28名、山形大学の学生ほか6名とみずほ有機栽培の生産者8名が参加し曇り空のなか実施しました。

第2回「田んぼの生きもの調査」東栄小学校

7月12日は、小雨が時々降るなか藤島町の志藤圃場の30aを藤島町東栄小学校の生徒20名、庄内農業高校生12名と庄内産直ネットワークの生産者5名、東京から消費者3名と「めだかの学校」の林さんが応援に参加し実施しました。

棲息環境調査は農業技術普及課の安藤さんが調査し、カエル、イトミミズ、コドラートによる水生生物の調査を全員でおこなった。

コドラート調査では、小学生の目の輝きが変わり見つけたコミズムシやミジンコに歓声があがり、「めだかの学校」の林さんに知らない名前の虫を次々に真剣に聞いていました。

[-田んぼの生き物調査プロジェクト：報告-](#)



6月13・14・15日 有機認証監査

有機農産物、特別栽培・栽培履歴農産物の外部機関（アファス認証センター）による年1回の監査がありました。春から作付けし夏から秋に収穫される作物の圃場を有機栽培は全圃場、ほかはサンプリングで検査員が監査しました。

最初に、収穫される作物は夏にかかせない有機の枝豆です。もうしばらくお待ちください。

庄内環境創造型農業推進会議で、第2回「田んぼの生き物調査」を6月4日・5日に実施

今回の調査には、県農業普及課や山形大学、東北公益文科大学、JA庄内たがわが参加し、全国規模「田んぼの生き物調査プロジェクト」に連動し約60名の参加者で実施されました。

調査指導には、同プロジェクトの岩淵成紀さん（宮城県田尻町の高校教諭）に来ていただき、前日の午後6時から藤島商工会館で事前ファーム・学習会を実施後、翌5日の午前中に、藤島町鷺畑にある有機圃場30aを時間をかけ学習的に調査しました。

午後からは、余目町にある有機圃場1ヶ所30aと藤島町鷺畑にある減農薬栽培圃場30a1ヶ所・慣行栽培圃場30a1ヶ所の3ヶ所の調査をおこないました。

終了会議では、参加者が県農業技術普及課の安藤さんを中心に調査データもとにした比較検討をおこない、今後の冬期湛水の栽培技術にデータがどう役立てられるのか、冬期湛水圃場における環境の変化について意見をだし合いデータの共有をするとともに、生き物調査の意義を十分に感じとりました。

[-田んぼの生きもの調査プロジェクト：報告-](#)



初夏を感じさせるように天気が回復した5月21 - 22日に、JA庄内たがわと一緒に取り組んでいる埼玉ユーアイコープとの「田植え交流」を行いました。今年は藤島町の志藤代表の圃場で苗を移植した後に、庄内一面が見渡せる丘にある柿畑で交流会をおこなった。また夜には懇親会を催し、庄内の風土や生協会員との親睦を深めました。



枝豆の移植がすすんでいます。生育がおくれがちですが、7月下旬からの出荷予定。今年も有機栽培、無農薬栽培に生産者が取り組んでいます。



佐藤 五十嵐 (取材 阿部)

5月連休から庄内では、田植え作業に入ってますが低温傾向の強い陽気がつづいて作業も遅れがちです。移植した枝豆、稲の苗もおそい生育になっていて注意が必要です。(昨年的高温は異例でした)

低温強風の合間、天候が回復した日の湛水不耕起栽培の田植え作業。5/11(藤島町鷺畑 志藤圃場) 湛水有機栽培4年のこの圃場では、4月始めからカエルが次々と産卵し、田んぼの中でオタマジャクシがたくさん泳いでいました。

右写真：苗を稲わら付近に植え付け

右写真：腐植した稲わらとカエルの卵塊、小さな黒線がオタマジャクシ？



5/11



5/11



4/19

4月26・27日に庄内での田んぼの生き物調査を開始(29日追加調査)

庄内では、最初の本格的な調査である冬期湛水圃場の生き物調査を、公益大学生・庄内農業高校生、めだかの学校の協力により実習的な意味合いを含めて取り組みました。

今回の生き物調査隊長には、山形県庄内総合支庁農業技術普及課の安藤さん。その指導で、田植え前の田んぼの中のイトミミズ・ユスリカや棲息環境調査(PH、溶存酸素、電気伝導度、酸化還元電位)を調査しました。

調査結果として、湛水有機栽培を継続している田んぼと湛水有機栽培が初めての田んぼでは、イトミミズ棲息数も約100万匹と700万匹と棲息数の違いがあきらになっていました。イトミミズは土の中に入り耕し、その糞は肥料成分になります。ユスリカは成虫すると蚊になりカエルなどの餌になる。カエルが増え稲の害虫を食べてくれます。田んぼの生き物を調査することで有機農業の新しい栽培技術や、人に安心感をあたえる豊かな田んぼをみつけていきたいと思えます。

今回調査には協力者・生産者あわせ延べ70人ほどの参加者があり、地域での関心の広がりを感じました。今回は、6月3日・4日にカエルやクモ調査・周辺調査を含めた計画をたてています。



開始前説明



調査方法の説明



イトミミズ調査中



庄内農業高校生



東北公益文科大生



棲息環境調査説明



農業技術課安藤さん

ようやく庄内平野も暖かい陽気になり、おくれた作業を忙しくこなしています。
4月12日、こんな風に組合員の方々は仕事をしていました。土づくり、育苗ハウスの整理準備、肥料運びなど。



育苗ハウスへ種まき後の箱並べ
(富樫 - 農業後継者)



育苗ハウス準備中
(野口)



出張前に急いで種まき
作業を・一服中の(志藤)



土地改良区の用事の帰り(斎藤)



種まき前の土づくり箱
入れ作業中（富樫）



育苗ハウス準備中
（工藤）



土づくり作業中（阿
部）



事業所の駐車場まで肥
料を取りに来た（佐
藤）



事業所の駐車場まで肥
料を取りに来た（芳
賀）



積み込み（佐藤、齋
藤）



育苗ハウス整理
（小野寺）



種まき作業中
（五十嵐英一）



この日、晴れ上がった
鳥海山

ことし、多かった雪とおそい春のためか、白鳥の北への旅立ちがおそく、春先に田んぼで餌をついばむ姿がよく見られたが、この日をさかいに北帰したようで見えなくなった。鶴岡市平田（4/2）

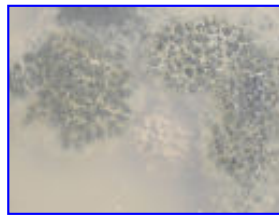
冬期湛水圃場（藤島町志藤）、産卵まもないカエルの卵塊がみられる有機圃場（4/6）



面野山近くの圃場



湛水圃場



志藤圃場の卵塊

3月11日 有機農産物・加工食品のリフレッシュ研修会を開催

有機農産物・加工食品の登録認定機関であるアファス㈱の認証部渡辺さんによる研修会を実施。
有機認証の5年目をむかえ、この間の変更箇所や今後改訂になりそうなところを重点に、9時から4時半まで約30名の参加で勉強をした。



主なテーマ

- 1-JAS規格の2005見直し
- 2-JAS制度の2005見直し

- 3-農水省からの通知等について
- 4-特別栽培
- 5-農薬取締法関連
- 6-検査・監査について
- 7-アファスの業務報告

各項目の仕組み、すすみ方について説明報告をうけた後、質問議論をおこない理解を深めた。

2月22日庄内協同ファーム・生産者集会を開催。

前年度の総括と05年度の作付け計画を確認した。二部の研修会では(午後から)、藤本農園の藤本氏が微生物農法による大規模有機農業経営について講演した。会場には、地域の生産者も集まり藤本さんを囲んでの活発な稲作技術について質問や意見交換をした。

2月12日・13日環境創造型農業研修会 湛水生き物調査(ふゆみずたんぼ)

[PDF](#)

岩淵氏による「たんぼの土の中、周辺の生き物を調査をする」ことで得られる自然の仕組み、働きについての講演内容は、参加者に新鮮な視点をあたえ、感動的な内容であった。

実施する生産者、調査研究者の「湛水生き物調査」への取り組みを、さらに理解を深めた。当日の12日は、94名の参加が地域の生産者、調査研究者、行政からあった。翌日13日は、30名の参加があり、これからのすすめ方、作業方法について研修した。また今後のスケジュールなどを確認し合った。

「庄内産直ネット総会」[PDF](#)

午前中に同じ会場で、「環境創造型農業研修会」に先だち、庄内産直ネット総会がおこなわれた。

2004年度の総括や今後の計画について話し合いをした。



2月12日「冬期湛水生き物調査」のシンポジウムを開催します。案内[pdf](#)

冬の間、田んぼに水をため、米ぬかなどを入れ光合成細菌、土の中の生き物や鳥などの生き物の活動でトロトロの土をつくり、化学農薬や化学肥料を使用しないで米栽培をする。その田んぼの生き物を調査することで、生き物の多様性を理解し稲作技術と環境とのよりより関係をつくっていく。そんな話しがきけます。

庄内協同ファームの生産者も「冬期湛水生き物調査」を実施します。



[表紙ペ - ジに戻る](#)